

天草市崎津地区におけるトウヤの価値認識に関する研究

熊本大学 学生会員 ○村上 汰誇瑠, 熊本大学大学院 学生会員 ○佐々木 大和,
熊本大学大学院先端科学研究部 正会員 田中 尚人

1. はじめに

現代の日本において地域固有の風景が衰退するファスト風土化という現象が問題となっている。地域固有の歴史、自然環境、生活・生業を継承する文化財制度として「文化的景観」が2005年4月に施行された。

崎津地区において、漁村集落として形成された風景が重要文化的景観に登録されているが、都市部への人口流出や少子高齢化により人口減少が激しく、漁業従事者が減少していることで重文景の重要な構成資産であるカケやトウヤの利用のされ方が変わってきている。また、地域内にあった小・中学校の廃校や様々な理由により地域内交流が減少している。

崎津地区では、生活・生業の変化の中で重文景としての価値だけを頼りに保存・活用を行っていくは難しいため、本研究では、地域住民のトウヤに対する価値認識を把握することを目的とした。

2. トウヤの価値構造

(1) 天草市崎津地区の概要

熊本県天草市河浦町崎津地区(図-1)は、天草下島の南西部、東シナ海に開口する羊角湾北岸の入り江に位置する。後背山林は200m以下の山地に囲まれ、山裾が海に落ち込んだ平場の少ない自然環境を成している。同地区では、山と海のわずかな平場に家屋を密集してできた漁村集落である。

2022年時点で人口は450人、243世帯が生活している。人口に占める高齢者の割合が53.6%、14歳以下の割合は5.6%である。2007年は、総人口が580人、253世帯が生活していた。1960年代は現在の4倍近い人口であったとされ、人口減少と少子高齢化が進んだ小規模な地区である。

崎津地区の漁業は明治期から昭和30年代までイワシ漁が盛んに行われていたが、乱獲などにより次第に衰えていった。羊角湾淡水化事業が昭和37年度に県計画に取り上げられ、昭和43年度に着工した。その後、崎津の漁業は羊角湾淡水化事業により海が濁り、現在では零細なものとなっている。



図-1 崎津地区の位置

(2) トウヤの価値構造

トウヤとは、崎津地区固有の呼ばれ方であり、家と家に挟まれ両家の屋根が重なり合い、多目的に使われてきた狭い路地を指す(写真-1)。28箇所が重要文化的景観の構成要素として登録されている。

文化財としての調査はされており、文化財をとりまく視点の整理⁽¹⁾としてトウヤは、営み「家や海へ行くための道」、「共有地的コミュニケーションの場」が上げられている。また、平場の少ない特徴的な地形の中で育まれた伝統的な土地利用形態として「軒が重なりファサードのような形態」が重要であるとされている。以上の整理より、トウヤの文化的景観の価値構造を「通行」「滞留」「景観」の3つとする。



写真-1 トウヤ

3. 地域住民のトウヤに対する認識の調査

本章では、地域住民のトウヤに対する認識を明らかにするために、「通行」「滞留」「景観」3つの機能に着目して半構造化インタビューを行った。

(1) インタビュー調査の概要

調査手法は、予め地域住民へ天草市役所観光課から広報を行い、インタビュー調査を行った。インタビュー調査の対象者(表-1)と質問項目(表-2)を示す。

表-1 調査対象者

	性別	年齢	職業	居住歴	居住地区	日時	時間
A	女	19歳	介護士	18年間	元船津	11月24日	45分
B	男	73歳	元:建設業	53年間	船津	11月24日	45分
C	男	67歳	元:運送業 現:公務員(臨時)	67年間	船津	11月25日	30分
D	女	75歳	美容室 案内所	40年間	船津	11月27日	15分
E	男	77歳	元:運送業	32年間	中町	11月25日	35分
F	女	72歳	お店	48年間	中町	11月25日	15分
G	男	76歳	元:真珠養殖 現:お店	76年間	中町	11月25日	20分
H	女	42歳	案内所	40年間	中町	11月27日	15分
I	男	69歳	元:漁師	62年間	下町	11月24日	170分
J	男	80歳	元:大工	80年間	下町	11月25日	50分
K	女	80歳	元:事務職		下町	11月25日	50分

表-2 質問項目

質問項目	
①トウヤの利用の変化	今のトウヤの利用
	小さいころからの変化
②トウヤの形態の変化	トウヤの形態の変化
	トウヤの形態認識
③トウヤの文化財的価値付け	

(2) インタビュー調査の結果

調査で得られた音声データはボイスレコーダーにて録音し、計222分の音声データを得た。すべての文字起こしを行い、計43,658文字のテキストデータを得た。

(3) インタビューの特徴

調査対象者による各質問項目に対する発話量割合(図-2)を示す。

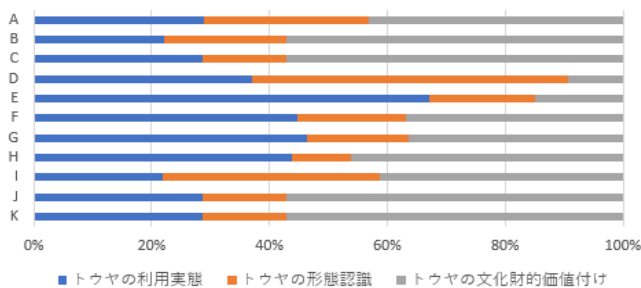


図-2 調査対象者の各質問項目に対する発話量割合

4. 地域住民のトウヤに対する価値認識の分析

インタビュー調査で得られたテキストデータのうち多くの発言が見られた生活・生業の道、家と家の間、観光地の3項目に着目し、地域住民のトウヤの価値認識を「通行」「滞留」「景観」の視点で分析を行った。

a) 生活・生業の道

漁師が船に行くためやカケでの作業を行うために

通らないといけない生業の道という通行の価値を認識している人が7名いた。また、トウヤの中に玄関を向けている家はトウヤを通らないと生活ができないという通行の価値を認識していた。また、トウヤの中に住んでいる人はその認識が強いことが読み取れた。Hさんは「トウヤを通ることが近道になる」。Eさんは「傘を差さずに外に出られる」、Iさんは「生ごみを海に捨てるための道」として通行の価値を認識していた。また下町・中町地区では、頻繁にご飯のお裾分けや軒先での会話が行われえていることが分かり、トウヤが滞留の場として認識されていることが明らかとなった。家への出入り・漁師が海に出るための通行は行動自体が必要不可欠なためトウヤに対して価値を感じやすいが、ご飯のお裾分けや井戸端会議など必要に迫られることのない行動では滞留を認識していても価値を感じづらいつことが分かった。

b) 家と家の間

家と家の間の空間をトウヤと認識しており、片方の家が解かれた場合は、トウヤではなくなったという認識が一般的であった。しかし、昔からの呼び名でトウヤと呼んでいるという。Dさんは「両家が屋根を出しているため濡れずに通ることができる」としての通行の価値を認識していた。Hさん、Iさんは「小さいころから通っていた家と家の間が、家が解かれることでなくなってしまふことにさみしさを感じる」と景観としての価値を認識していた。

c) 観光地

崎津の地域住民にとっては当たり前の風景であるため、観光地であることが理解できないという認識が多くみられた。地域住民であれば誰でも通って良い道という認識はあるものの、観光客がトウヤに入ってくることにプライバシーの侵害を強く意識していた。

5. おわりに

これまで、地域住民が文化的景観としての価値構造を認識しているかを分析してきた。今後地域住民にとってトウヤの保存・活用がもつ意味や手法について研究していきたい。

参考文献

(1) 天草市崎津の漁村景観保存調査報告書・保存計画書,平成22年10月,天草市教育委員会